

第3回普代村教育振興基本計画策定委員会 会議録（要旨）

日時	令和7年11月20日（木）午後15時30分～午後17時10分
場所	普代村役場3階大会議室
出席者（委員）	◎山本博史委員、○橋本裕之委員、大芦賢一委員、高浜菜奈子委員、黒渕博文委員、大上和吉委員、釜谷壽人委員、古馬丈裕委員、宮本英紀委員、小野寺はるか委員、佐々木弘樹委員、松本一純委員 ◎：委員長、○：副委員長
出席者（村側）	三船雄三教育長、道下勝弘教育次長、滝浦千加良指導主事、前川正樹生涯学習係長、中村克成政策推進室長、栃木美穂室長補佐（政策推進室）、小原睦史主事（政策推進室）

会議概要
1. 開会 2. 挨拶 三船雄三教育長 山本博史委員長 3. 協議事項 (1) 第1期普代村教育振興基本計画素案について (2) その他 4. 事務連絡 5. 閉会
【配布資料】 資料No.1：第1期普代村教育振興基本計画素案 資料No.2：第1期普代村教育振興基本計画策定に係るアンケートの自由意見

●協議事項（要旨）

(1) 第1期普代村教育振興基本計画素案について

○山本委員長

協議事項1について委員の皆様から質問・意見等あったらお願いしたい。

○宮本委員

14ページの基本理念、「きずな」と「いのち」と「ふるさと」の学びを育み、未来を創る普代の教育ってすごくいい教育理念だと思います。

その下に、本村では少子高齢化、人口減少が進行しなどと説明がされている。それは、村の政策であって、村の教育行政や教育の現場で人口減少とか少子化とかを追い求める場ではないと思うのですが、どうなのでしょう。

読んでいてすごくいいなと思ったのは、18ページの重点プロジェクトで、「子どもたちは村の宝です。子どもたちは守り育てる存在であると同時に、村に活力と明るい未来を与えてくれる存在です。明るくたくましい普代っ子たちの将来を、学校と村民自身の手でしっかり

と切り開きながら、村民自身がよりよく生きる勇気と活力、そして村への誇りを生み出していく、そのような学校と地域の在り方を目指します。」とあるが、これこそ基本理念ではないかと思う。18 ページの素晴らしい文章が基本理念に来るのではないか、これはすごいしくりくるなど自分自身は思う。

○事務局

これは、平成 20 年度に策定した普代村教育ビジョンで初めにこのように書かれており、そこで、今回 14 ページに事務局案としてこのような理念を掲げさせていただいた。ご指摘については、少し検討させていただきたい。

○山本委員長

確かにそうですね。5 章の文章を 4 章とかに入れて、もし人口減少うんぬんということであれば、こういう理念を掲げることによって、こうした人口減の対策になりうるってことは、短くても問題ないかと思うので、やはり理念をしっかりと書くべきだと思う。

○小野寺委員

17 ページの施策体系を見たときに、理念は案としてはあるものの、つながりがよく分からない。ぱっと見たときに意味が分かりづらいなっていうのと、見づらいと思った。

重点プロジェクトで普代型スクール・コミュニティについて挙げているので、せっかく新しい学校としてやっていくのであれば、核なる何かを目指して、他のところにはない、普代だけ、普代ならではの、人口が少ないからこそならではできる何かを掲げてやっていったらいいのではないかと思った。

○事務局

今、2つの指摘があり、つながりということと見やすさについての指摘であった。確かに、全体的に計画書のページを開くと一気に情報量の多さで読みづらさというのが最初に出てくるなというのは率直な感想だと思う。そういう見やすさという点は工夫をしていきたい。

そして、特色があるものということで、20 年度から進めているスクール・コミュニティ構想の実現が、体系につながるような仕組みっていうのをもう少し時間をいただいた中で考えたいと思っている。

○橋本副委員長

「きずな」と「いのち」と「ふるさと」はもう大事なことだとは思っている。個人的には「きずな」は余り好きな言葉ではないので、むしろ「つながり」とかそういう風にした方がいいだろうとは思っている。

それはまた話す機会あると思うが、基本理念と基本目標が無関係だ。基本理念で、「きずな」、「いのち」、「ふるさと」といいながら、基本目標で学び合い、助け合って、これはいつも普代村の小学校でも中学校でも言っている理念だし、大綱にも入っているもの。それで、理念があって、目標があって、施策があるということだとしたら何かおかしくないか。で、しかも「きずな」「いのち」「ふるさと」っていうのはその後どこにも出てこない。

で、あえて言うなら、学び合い、助け合い、というのが今までこれで大事にしてきたものであるのならば、これも個人的には好まないが、それはいろいろな経緯もあり、あえて言えば、それが理念みたいなことになるのかもしれない。だけれど、今回、一貫校ができる、そして新しいスクール・コミュニティという概念を打ち出すのなら、そのスクール・コミュニティの中の新しい目標をきちんと提示するような、会社で言うと社是みたいなものが必要だ

と考える。

そうしたときに、その後、何もつながってっていない。私は、この3つの「きずな」と「いのち」と「ふるさと」というのが、言ったら3つの柱だと思う。ある方から教えてもらって、久慈市では5つの柱を立てている、言われてみて見てみたが、ものすごく分かりやすい。中身ははっきり言って普通のこと言っているだけって失礼ですが、分かりやすい。

で、今日のこれも、なんなのだろうという感じになっていることは否めない。長いし、だらだら、だらだら書いている。まとまりがない。で、もうちょっと整理しないと、このような計画を誰がきちんと読むのだろう、誰が聞いてくれるのだろうと、さすがにちょっとなんかイライラしていたので、さらにクリアにしましょうと。

クリアにするときに、減らせて言っているのではない。「きずな」と「いのち」と「ふるさと」というのを仮に立てるのであれば、これに沿った形で施策とか取組というのがぶら下がっていくように作るのがこういうものの作り方だと思う。

あと施策として11も上がっているけど、これも何とかならないのかと思う。で、11であがっているものを見ると、別にスクール・コミュニティって言わなくたって、今までもやっていることですよって思う。

そうではなくて、小野寺委員も指摘したように、新しいスクール・コミュニティ、どこもやっていないような、近隣では全くないようなことを今までこの教育振興基本計画を作っていなかったから、ある意味でこれは遅れていたわけだけれども、新しい学校ができて、新しい概念を出して、言ったら遅れていたところを一挙に前に出て、打ち出していこうというようなことがある。で、そうしたときに、どこがどう打ち出しているのか、というのが全く分からないと思う。

で、この、例えば3つの柱とかを立てることによって、なんかこの学校ではこのようなことやるのだっていうことで、これがふさわしいかどうか分からないけど、そういう風に作るべきだっていうのが1つ目。

もう1つは、スクール・コミュニティという概念を理解なさっているのだからっていう風に強く思う。スクール・コミュニティというのは、先ほどの総合発展計画の議論の会議でも申したけども、学校とコミュニティっていうのは一体で考えるっていうことになるわけである。これをなんとなく使っているのだとしたら結構恐ろしい、怖い概念で、従来の学校教育とか生涯学習とか社会教育というのを分けていた、その分け方自体をひっくり返してしまおうと、壊してしまおうっていう考えだっていうことになる。

そうすると、これを見ると基本政策で学校教育と社会教育が綺麗に分かれている。このようなことをするからスクール・コミュニティのイメージが全く伝わらないと思う。そもそもこれが間違っていると私は思う。学校教育と社会教育という2分法的な、日本の明治以降、長らく学校教育を支配してきた伝統的な考え方で、それから教育基本法にもあるようなものですけども、それを壊してしまいかねないような、非常にすごい、斬新といえば斬新な概念だということを考えたときに、このまずこの分け方をやめてほしい。で、そうではない別の立て方として、例えば僕は「いのち」というのは、前日も言ったけれども、やはりいじめの問題とかすごく深刻だと考えているので、例えばその「いのち」などは軸になることだと思うが、その他にもいくつか柱があるのだったら、それをこの基本施策の大きな柱として3つなり、4つなり、5つなりを立てていけば、それが新しい普代の学園の向かう方向性って

うことになるのだろうと思う。で、これを見ていると、一体どこがスクール・コミュニティなのかという風に非常に強い疑問を感じる。とりあえず、まだいっぱいあるけれども、以上である。

○事務局

17 ページの施策の体系についてご指摘があった。そして、久慈市の計画という話があった。やはり計画を作る際に、私共が見るものというような視点ではなく、村民の皆さんに読んでもらうための見やすさというところが必要だと思っている。そして、スクール・コミュニティ構想の実現。スクール・コミュニティの前に普代型とあるが、その特色をどのように持たせて、そして理念である「きずな」と「いのち」と「ふるさと」、ここに、どのようにつなげるか。ご指摘の通り、そこについては、そのつなげ方とか、基本目標の設定の仕方等々含めて検討をさせていただきたいと思う。もし、橋本副委員長がよろしければ、後程ゆっくりご指導いただきたい。

○橋本副委員長

今、小野寺委員が話したことで、19 ページの(2)に普代村スクール・コミュニティ構想の目的が書いてある。このどこが目的なのかと思う。義務教育学校を核として取組を推進していくということを言っているだけであって、それは何をするためにスクール・コミュニティを作るのか。で、それはもちろん宮本委員が指摘したように、人口減少に対応するために学校を利用しているわけでは決していないと思う。

しかし、実際、新しいスクール・コミュニティが発足して、いい形で動いていくことにより、恐らくこの普代村で考えたいのは、人口減少の問題も解決するようなことにつながれば素晴らしいと思う。

それを具体的に言うと、岩泉とか他の近隣の田野畑とかからも、この学校だったらぜひ入れたい。越境しても入れたい。都会ではいくらでも越境なんてあるわけだが、なかなかやれない。で、入れたい。もちろん綺麗な学校ができると聞いているけれども、綺麗なだけでは誰も来ないので、その綺麗な学校の中身もすごいっていう風な感じを作っていくかという風な感じを作っていくか。で、それには、今はここにあがっている「いのち」というのも絶対に大事だと思っているし、「ふるさと」も大事だとは思う。でも、「きずな」がちょっとって言いましたけれども、しかし、やっぱりネットワークということ言うと、つながりとか、交流という風なことはやはり大事だと思っている。そういうようなことをちゃんと目的としてここでうたうべきなのに、何を書いているのかなと。この、(2)のところ、要するに目的がはっきりしないので、結構悔しいなと思っている。その後の役割のところ、こっそりとフリー・スクールの開設と書いてあるのだけど、こっそり書くことではないだろうと。

もっと「いのち」を大切な学校を作るから、それはそのためにも大事なことの1つなのだという風に、きちんと熟読しなくても分かるように、一目見たらぱっと分かるように書いてほしい。で、それが伝わらない。それはいかがか。他の方はどう思われるかというのをちょっと思っている。

○山本委員長

現在、第5章になっていて、重点プロジェクトとかで書かれている内容はむしろ理念なのだろうと思う。それを例えば4章のところを持ってきて、で、そちらに持っていくことだけではなくて、例えばスクール・コミュニティっていうことを目指そうとしたら、今度、学校

は地域とつながらないといけないし、地域の方も学校とつながらないといけない。やはりそういう意味では、スクール・コミュニティといいながら、従来の学校教育の中で、例えば地域とどういつながりができるか、で、社会教育の中でも学校とどういつながりができるかという形で触れることについては別に問題はないと思う。決して学校教育、社会教育に2分法的に分けるっていうのではなくて、その領域がなくなっていくわけであり、両方の中でお互い相互に浸透し合う、そういう形で学校教育のことに触れ、社会教育のことに触れるという書きぶりにすれば、多分橋本副委員長が言われた部分はクリアできるのではないかと思う。

○宮本委員

自分の子どもは小学校に来年から入学するのですけれども、やはり一番不安なのは、前回も言いましたけれども、人間関係は硬直化というか、いじめがあって、そこから抜け出せないっていうのがやはり一番不安な部分で、正直、普代村では選択肢が少ないような気がしている。先ほど話のあったフリー・スクールだったり、あとは転校で、例えば野田に転校するとか。今はもう学校に行けないのだったら小学校を転校するしかなく、正直別にそれは選択肢の1つであっていいと思う。転校は、逃げるとかではなくて。

教育委員会としては、すごく書きづらいとは思いますが、転校も選択肢の1つですよってことを別にうたってもいいと思う。確かに教育委員会としては転校を推進するというのももちろん良くはないと思うが、選択肢の1つとして、転校した後も普代村は支援しますとかそういう形にしてくれれば、教育委員会がそう提供されれば、いじめとかで転校するかどうか悩んだ親や子どもからすれば、転校して、そこで新しい生活をしようという選択肢が増えるわけで、一番つらいのは選択肢もなく、ただ辛い学校に行くというのが一番しんどいと思う。教育委員会でそれを文章にするのはきついと思うが、選択肢の1つとしてあげて、転校しても普代村は支援をしますというのがあっていいのではないかと、個人的にはそう思うが、どうか。やはり書きづらいものなのか。

○事務局

転校後の支援について、計画に盛り込むことは考えていない。

○宮本委員

書けないというのは理解した。ただし、サポートということはいかがか。自分が見た経験であるが、来られないから野田小学校に通学している子どもがいて、野田のスクールバスから降りて、そこから国道45号を歩いて、帰る子を見たことはないか。そういう話は、教育委員会に上がってこなかったか。

○事務局

いいえ、上がっていない。

○宮本委員

自分は、運転をされていて見たことあるのだけれど、純粹に危ない。通学路でもないし、歩道は狭い。実際にそういう子いて、送迎をできないか親に聞いたことがある。でも、親も仕事をしているので、いないときは歩いてくると。

結局一番しんどい思いしているのは子どもであって、「普代から送迎バスを出してもいいですよ」とかっていうことは、確かに行政の線があって、それはできないかもしれないけれど、そういう形で、例えば転校をしても、通学には安全をしっかり確保しますとあって、何

か子どもの安全を守るっていうところで、できていなかったのではないかと思っていた。

そのため、例えば、転校をして、通学路で危険な道を歩くぐらいだったら、そういう通学の支援とかは、できないものなのか。どうなのか、教育委員会の問題じゃないのかもしれないけれども。

○事務局

まず、通学バスの運行については、児童の在籍する学校と自宅の最寄りのバス停というようなコースで、それはどの市町村もそうだと思うが、私の聞く範囲では、これは野田ではないが、田野畑に越境をされた児童については、普代村に田野畑のバスが来て、送迎をしていたというような話もある。普代村が越境してスクールバスを走らせるのではなく、在籍している市町村の通学バスを利用するのが基本であると考えている。

ただ、今のお話に関する情報については、野田の教育委員会を確認する。それで、何ができるか考えることとしたい。

○宮本委員

承知した。

○山本委員長

19 ページにフリー・スクールの開設とか、簡単に書いてあるけれども、20 年ほど前に私の地元の池田市で、NPOが市の遊休施設を使ってフリー・スクールを作っている。その運営協議会のメンバーであったが、当時は文部科学省の事業という形でお金が出たので何とかできた。

しかし、実際にフリー・スクールをやろうとすると、まずは人材を確保しないといけない。で、経営的にはある程度成り立たせなくてはならないということで非常に難しい。フリー・スクールのようなものを例えば村の中に作って、で、そこに通うことで元いた学校と同じ授業時間数を受けているのだという形を取れば、いじめ等で居場所がない、逃げ場所がないっていう子どもたちを救うという、そういう可能性が出てくるのではないかと思う。

そういうことであれば、教育委員会は書けるのだろうと思う。

他にご意見ないか。

○高浜委員

スクール・コミュニティについてちょっと調べたりしていたが、ここに地域とともにあり、地域の力を活かしてという風なことが書いてあって、では一体地域の力で何なのだろうって思っている。

で、1 回目策定委員会のときも、普代の特色って一体どういうことかという質問し、私も地域の方たちといろいろお話をさせてもらう機会があった。

で、その中で、やはり地域の方々が言っていたのが、例えば漁師さんから「船に乗せてあげられるよ」とか、「自分が小学校のときは集まって星空を見たよ」とか、そういう話をいろいろ聞かせてもらって、私もすごく感動した。

で、先週、友人が東京の方から遊びに来ていたときに、5時に普代駅について、最初に言われたのが、「暗すぎるよ」といわれた。暗すぎると言われた翌日に野田の方に行って宿に泊まったのだが、そのときに見た星空が本当に綺麗で、友人たちはすごく感動していた。で、暗すぎというのは多分普代の特色の1つだけれど、それが外から来た人からするとものすごく感動だった。また、地域の方々がいろいろ教えてくれた、船に乗れるよとか、ユンボを動

させるよ、土をかき混ぜられるよとか、いろいろな話があって、それってなんかすごく地球を体験できる村なのだなって私は思った。

で、普代村が地球村普代っていう風に挙げているので、何かそういう文言を理念だったり目標だつたりに入れられたらいいのかなと思ったのが1点ある。

もう1つは、「きずな」と「いのち」と「ふるさと」の学びを育み、未来を作るぐらいの教育ってあるが、「きずな」と「いのち」と「ふるさと」というのが、私は未来と余りつながってこないなと思っていて、何かというと、「きずな」と「いのち」と「ふるさと」の学びを育みっていうのは、何を学ぶかっていう話をしていると思っている。

計画の4ページに挙げてあるように、これからの社会、本当にブーカの時代で、予測不能な時代だから、私たち大人の世代も本当に直面したことのない世界になっていくとされていて、仕事もなくなるって言われている。私もチャットGTPとかを使って企画書を作ったりして、本当にもうそういうもので世の中が回っていくのだなと思ったときに、子どもたちがしなきゃいけないことは、何を学ぶということではなくて、どう学ぶかを学ぶということだと思う。何かを学ぶというのはもちろんあると思うが、未来を創っていくということを考えたときに、次の、もっともっと次の社会を見越した理念だつたりとかにしていけないと、多分、行き詰まると思う。なので、この「つながり」、「いのち」、「ふるさと」ももちろん大事だと思うので、どこかに入るといいなとは思いますが、未来を創るっていうことの意味をもう一度話す方がいいのかなっていう風に思っている。

○橋本副委員長

今の話はすごくいいと思う。結局何を学ぶかという、知識とか学習とかというものをどう考えるかという、かなり原理的な問題だと思う。ノウイング・ザット、「～だということを知っていること」という、そういう知識で、それは、国語、理科、社会とかになっていたりする。知識は、脳や精神の場だけでやっていることではなくて、自転車に乗れるようになるっていうのも知識だとか、ノウイング・ハウって言うけれども、そういうものだって知識なわけだ。

今の話は、例えば、今アクティブ・ラーニングという言葉がある。大学でいろいろとそういうことをしていた。また、学習指導要領でも、いろいろな体験的な学習というのは、文部科学省もすごく言っている。それやっていくためには大変なマンパワーが必要なのは分かるが、普代村にはそういう資源というか、人的資源は、たくさんいらっしゃるんで、そういう環境もある。で、どう学ぶか。それは実際にやってみる、体験してみる、船に乗ってどっか一緒に行ってみるとか、パン屋さんと一緒にパンを作ってみるとか、あとそれを見るときか、どう学習するかということは、別にあちらこちらの学校でやっていることで、別にそれはそれほど極端なことではないが、この辺ではあんまり聞かない。そうしたときに、そういうことを新しい学園でやっているのだからということ、やるのだからということになれば、それにひかれて、じゃあうちの子もそこに行かせたいっていうことってあるのではないかと思う。

確かに、私も、何について学ぶかっていうことばかり意識してしまうのだけれど、どう学ぶかっていうこと、同じことであっても、知識として勉強するのではなくて、実際にやってみる、そしてそれができるようになる、それを実感できる、そういうことっていうのをやれる学校っていうのは、基本理念なのではないか。そのように今思った。

○山本委員長

いろいろと話を聞いていて、「きずな」という言葉がちょっと引っかかった。むしろ交流事業みたいなことがあるので、「つながり」の方がやはりいいのではないか。

例えば、高齢者と子どもたちが交流する、つながる。そのことで高齢者からさまざまなことを学ぶということもあるだろうし、で、村外の子どものともつながること、例えばオンラインとかいろいろな形でつながることで、いろいろなことを子どもたちに感じてもらう。そういう意味では、「きずな」というよりは、「つながる」という言葉を使った方が腑に落ちるような気がする。

○橋本副委員長

「きずな」は内向きで、縛る形になるかと。

○山本委員長

多分、4章と5章のところの書き方を変えれば、ずいぶん変わるのではないか。その辺りをちょっと相談しながら検討するっていうのはいかがか。よろしいか。

○宮本委員

第6章の施策と取組の内容というところで、いろいろなアンケート結果を見ていると、やはり自然がいっぱいとなっている。でも、この6章も全体読んだときに、自然、自然といいながら、通読したけれど、自然に関することは43ページのチョウセンアカシジミの保護・観察の実施ぐらいしかない。自然に関することは第6章を見ても、これしか書いていない。あまりにも少なすぎないか。例えば、先ほど言っていた夜空、夜の星を見るとかもできるし、漁船に乗る体験も自然体験だ。今年、狩猟を見たけれど、例えば罠の設置を体験してみるとか、かかった獲物を見てみるとかも自然体験だ。ちょっとこの第6章における自然の内容は薄いのではないかなと思っていて、先ほどもいろいろな意見出たと思うので、もう少し盛り込んではいかがか。

○事務局

この計画の中に狩猟体験とか、具体的な何々体験みたいなものも載せることは可能であるが、それが現実できるかどうかというところも判断をしながら、自然を生かした体験、学習のところの文章を工夫させていただきたい。

○宮本委員

文章で書くのは難しいということ、後、その実施の内容も精査しなければいけないというのはあると思うが、それは、いつどこで具体的に決まるのか。文章では難しいというのは理解した。学校が出来上がって、そこからスタートしていくっていう感じなのか。

○事務局

この計画は、村の将来に向けて、5年、10年を見据えた中での計画、方向性を示すものであるので、宮本委員が言っているのは、おそらく、実行計画、アクションプランはどのような話なのかと思う。アクションプランの見せ方等については、ここと並行して作ることができればいいのだけでも、それは具体的に5年、10年を見据えた中で何が具体的に取組めるのか内部で検討したり、協力者の皆さんの意見もいただいたりしながら取り組むべきものかなと思っている。まず、この本体については方向性を示させていただきたいという考えであり、具体の自然体験等については、実行計画の方に盛り込んでいきたいと思っているので、ご理解いただきたい。

○橋下副委員長

今の事務局説明の通りで、例えば自然体験とか、いっぱいネタがあるので、いろいろなことがアイデアとしては出てくると思う。で、例えばフリー・スクールを作ることも、具体的にどのような取組をするかっていうようなことだと思うが、この計画は、そういう個別的な事業が妥当であるかとか、そういうことを検討する場ではないとは思っている。ただし、そのようなこと言ったら、知らないうちにフリー・スクールの話どこ行っちゃったとか、自然の話どこ行っちゃったっていうのになるので、ここで考えるべきなのは、取組の部分で、ダラっと上がっているけれど、実際にはそれぞれの方が、このような取組があったらいいよね、わくわくするよねっていうのは、あるわけで、そういうものをもう少し一般化して、蒸留し、蒸留していくと何になるべきなのかというようなことを考え、それが多分基本施策だったり、あるいはもっと言うと目標だったりすると思う。で、例えば自然を体験学習するみたいなことが念頭にあれば、そういうことが可能な柱を立て、枠組みを作ろうっていうことを意識していればいいと思う。一文としてフリー・スクールって入っているのではダメで、一文として自然を取り入れて体験もやりたいとか、そういうことではなくて、それは、今ここで議論するのは、そういうことを念頭に置いたうえで、どのような柱を、主要な柱を立てるべきか、ということだと思う。なので、宮本委員の言ったようなことは、いずれ学校で取り組むようなこととして、現状で頑張るべきなのは、この意見を踏まえて、そういうことができるような計画を作るっていうことだと思う。この計画に、反対に言うと、こういう計画を作っているからこれをやるって話になっているよねというように作ればいいわけであると思う。したがって、具体的に今自然が入っているか、入っていないかという話ではないのかなと思う。そこは余り心配しなくてもいいのかなとは思っている。

ただ、自然を体験学習するということには両面がある。自然のこと、対象を取り扱うって問題と、体験学習するって方法の部分の両方あるわけで、それがきちんとカバーできるような、これだけではなくて、いろいろなことがある、そういう、そのために自由意見を聴取していくわけなので、それをできるだけかなえるような柱を作っていくことが、とりあえずここで私たちが求められていることだと思う。

○ぎょうせい

自然体験についてはアンケートの意見を反映し盛り込んでいる。幼児教育や学校教育の方でも、地域の自然環境かを生かした教育を作りますということに記載している。生涯学習でも、地域での生態系の維持に向け、村民参加による動植物の生息とか生育状況の調査とかということを盛り込んでいます。

○橋下副委員長

その課題は盛り込んでいるけれども、それが解体されてバラバラにまき散らされているような印象であるということが、最初に小野寺委員が指摘したように、なんだかよくわかんないって話につながっているのだろうと思う。

○山本委員長

先ほどの件で、私の方からちょっと言いたいことがある。あくまでこれは基本構想・基本計画である。実施計画の中でどうやっていくかっていう話になると、これは教育委員会とだけではなくて、教育の現場の方でも既に義務教育学校のグランドデザインを作られているし、総合的な学習の時間だとか、いろいろな教科に落とし込んでいくことをやっていく中で、例えば自然についてのものなどは見えてくるのだろうと思う。それをここで何もかも決めてし

まうと、逆に学校で「決めたのだからやれ」という形になってしまうので、それはちょっと無理かなと思っている。

○高浜委員

ちょっと話題を変えてしまいますけれども、先ほど普代村の特色っていう話をさせてもらった。普代村はやはり人口がすごく少ないという中で、どうやって学校をやっていくのかとか、地域をやっていくのか、みたいところが1つの観点なのかなと。先ほどの目的のところでは宮本委員が言っていたみたいに、人口減のことが結構前に来ていたりとかして、そこが1つの課題感なのかなと思ったときに、でも、人数が少ないからこそそのこともあるなっていうのをすごく思っていて、文科省の文章とか読んでみると、今、個別最適化の学びみたいな形になってきていて、人数が少ないからこそ、1人1人を大事にし、村民もそうであるが、私もこのようなどころに出ささせていただいたりとか、1人1人がすごく役割があって、1人1人がすごく大事にされているなっていうのを感じている。なので、その1人1人が大事にされているっていう村だよっていうところを、教育の理念の中にも入り込んでいけるといいのかなと思っている。そういう意味で言うと、やはり個別最適化の学びというところが1つ重要なかなと思っていて、アイパッドみたいなものを配られて、同じプリント、同じ内容のことをやるのではなくて、それぞれがそれぞれの進度で学んでいけるっていうところが強化されること。この辺では余りない、きちんと個別にやっていけるっていうところが1つの魅力になるかなと思った。

○山本委員長

他に何か意見はあるか

○佐々木委員

ちょっと確認したい。この計画が正式に出来上がれば、村民の皆さんの中に配布するような感じになるのか。

○事務局

正式に決定となったら、概要版については全戸配布を予定している。本体全ページにつきましては、村のホームページに掲載する予定としている。

○佐々木委員

結構文字がいっぱいで、みんなに配っても読むのが大変かなって。文科省とかで、リーフレットとかを出しているの、そういうのをぜひ作ってほしいなっていうお願いをしようと思った。

○事務局

概要も本体についても見やすさを重視して作りたいと考えている。

○山本委員長

先ほどの自然に関しては、ここ何年かの普代小、普代中の教育の活動を調べたが、いろいろとやっている。で、そういったことが実施計画の中に入るのだと思う。

ネダリ浜の清掃やワカメの飼育とか、いろいろなことやっている。そういうのが多分実施計画の中にいっぱい入ってくるんだろうと思うので、そこは余り心配していない。

他にご意見ないか。特になければ、協議事項について終了する。

以 上